

論 文

矛盾、曖昧さ、荒唐無稽さを含んだ物語について

— Lévy-Bruhl の『原始神話学』と臨床心理学的視点 —

田 中 史 子

そしてわたし自身「^{ろば}驢馬の皮」の話聞かせてくれるなら、ひじょうに喜ぶことであろうに。
(Lévy-Bruhl, 1935)

I. はじめに

Lévy-Bruhl は『原始神話学』を、上記のような言葉で締めくくっている。「驢馬の皮」という言葉で Lévy-Bruhl が示しているのは、曖昧で矛盾に満ちた原始神話や、その名残を残す荒唐無稽さを含んだ物語のことである。学問的な著作の締めくくりとしてはまるで論理的ではないこの言葉は、文献からの推論や概念的な思考で構成された世界から、人間が“わたし自身が～と感じる”という思いとともに生きている世界に、読む者を引き戻すためにあるかのである。理屈を超えた体験的な主観の力強さが、ここで示されている。

Lévy-Bruhl, Lucien (1857 ~ 1936) は、フランスの哲学者・社会学者である。彼が提唱した「前論理」「融即（『原始神話学』の邦訳では融即 participation は「分有」とされている）」という概念は、『原始神話学』に先立って著された『未開社会の思惟』の中ですでに詳しく論じられている (Lévy-Bruhl, 1910)。Lévy-Bruhl は、未開社会においては、前後関係の順序や論理的な因果律に従ってではなく、「神秘的な内部関係の共同根柢」によって現象どうしが結びつけられているとし、「それは反論理的

でもなければ無論理的でもない。それを前論理的と呼ぶとき、私は我々の考え方のように何よりも先ず矛盾を避けるように強制されることはないという意味させただけである」と述べる。“文明社会の論理的な因果律”と“未開社会の前論理的な融即律”を対比させるこの考え方は、文化人類学者などから、原始心性を現代人の心性から排他的に区別すべきではないという批判を受けた。

これらの心性が二分されるものではなく連続したものであるという批判は、現代社会において人々が必ずしも論理的であるわけではないことを考えれば、もっともなことであろう。しかし、『未開社会の思惟』や『原始神話学』を読むと、「融即（分有）律」「前論理的心性」を提唱した Lévy-Bruhl の主要な意図が、西洋文明と未開社会のあいだに差別的な一線を設けることにあったとは思われない。ここで注目されるのは、彼が、『原始文化』(Tylor, 1891) に代表されるイギリス人類学派の研究に対して、彼ら自身の考え方に方向づけられた独断的な説明を原始的な人々に押しつけているとして批判的態度を示していることである。つまり、Lévy-Bruhl が自身の原始心性論で示したかったことは、西洋文明の基準で未開社会を判断するのはその社会の現実に則していないということなのである。文明/未開を区別したというよりも、研究者が属する文化にとってもっともらしく思える1つの軸で現象を理解しようとしてはなら

ないことを主張したといえる。

『原始神話学』では、古典神話や民俗学的な説話とは異なる、神秘的存在が生き生きと感じられている物語への了解をめぐる、以上に述べた Lévy-Bruhl の姿勢が、『未開社会の思惟』よりもよく示されている。本稿では、そのような彼の姿勢に、心理臨床にとって示唆的なものが含まれているのではないかということを中心に論じていきたい。

Ⅱ. 『原始神話学』に見られる荒唐無稽な物語の源流

① 原始神話の特徴

『原始神話学』では原始神話の特徴としてまず、それらが古典神話のように体系的に纏めあげられておらず、一般に不完全で断片的で、整理を欠いており、相互間に矛盾を生じるのを避けられないことが挙げられている。原始神話の語り手は、それらの矛盾には気づかないことも多く、気づいたとしても無関心であり、「彼らはみな神話を心底から信じ、この方面にはほとんど論理的な要求を抱いていない」(p5) のである。

これに続いて、原始的な部族のあいだで用いられる表象が概念には還元できず、「悟性では了解されがたい」曖昧さや荒唐無稽さを持つことが多くの例を挙げて語られる。おそらく近現代的な悟性にとって理解されがたいであろう興味深い一例を挙げると、パプアのドブ族が性別・年齢を問わず部族の人間に対して用いる「トモト」という言葉は、白人には用いられないが、ヤム芋には用いられる。「トモト (人間的であるもの)」は、「人間」という概念と同じではない。それは「ドブ島の住民に共通した分有の総体」を含んだ複合的な意味を持つ。神話期から時空間を共有し神秘的な力を分け合う部族に属する

ものの中に、ヤム芋は入るが白人はそうではない。このように、近現代の論理的思考ではまったく別のカテゴリに属するものどうしが意味を分け合い複合を形成する。原始神話でも、事物や現象がそのような複合で捉えられており、神話的祖先、超自然的存在、動植物、土地、その他の様々な事物・現象が、人間が存在することに時空間を超えて前論理的に結びつく。そのために、そこで用いられている言葉を明確な概念で捉えることが困難になる。「われわれが別箇であるとみなす習慣のあるもの、すなわち因果律または生産性、親縁性、時間および空間の中における一などの関係が緊密に結合、あるいは一緒に溶け合ってさえいる」(p51) と Lévy-Bruhl は述べる。

例えば、神話では、動物と人間は容易に同化する。「この同化は甚だ自然に行なわれ、たびたび説明なしにすまされている。神話が人間を語っているかと思うと、突然に、話の途中でカンガルーになったり、その逆が行われたりする。…(中略)…『カルビに二羽の鷺が棲んでいた…。彼らは高い岩の上に巣をつくっていた。またこの巣には二羽の小鷺がいて、これらを年とった鷺どもは、ワラビの肉で育てていた。ある日、年とった二羽の鷺はすまいから遙か遠くへ飛んで行って、そしてエリチャクワタに着いた…そこで灰色のカンガルーを槍で突き殺した。』これらの年とった鷺どもは、それでは人間であったのだろうか、いつ彼らは人間の姿をとったのだろうか。神話はそこをはっきりとさせる必要を認めていない」(pp62-63)。

このように、『原始神話学』では、神話における人間と動物、事象と事象の同化や変転がしばしば強調される。このことから、Lévy-Bruhl が原始神話に語られる神秘的存在を、固定化されない、流動的な生々しいものとして捉えていることがわかるだろう。こうした神秘的

存在のイメージが、動物から人間への変身や動物の擬人化として単純に解釈されるものではないという点については、のちに考察で論じることにした。

② 神話的世界の持つリアリティ

原始神話を「論理的な枠内」に押し込めなくさせる矛盾や曖昧さは、Tylor, E.B. などのイギリス人類学派の見解によれば、人々は現象の説明として神話を考え出すが、論理的な能力の弱さのために混乱を起こした結果であると受け取られる。Lévy-Bruhl はこのような考え方に對し、論理を志向する「われわれの精神の方向」を原始心性に当てはめる理解であると批判し、「わたしには逆に、その世界は彼らではそのまま所与であるように思われる」と述べる。彼は、説明としての神話を否定しないが、「この神話的世界は彼らにとっては、夢なり、不思議な異常なものなり、出来事なりなどによって啓示された直接的な現実であって、彼らはそこに普通経験の世界で与えられたものをどう説明するか求める」(p32) ことを主張する。現象の稚拙で不十分な論理的解释として原始神話が生み出されるという考え方では全てを理解できず、実際の経験（そこには夢や超常的な体験も含まれる）から神秘的な存在が疑いもない現実であるとする確信がまずあり、それによって現象が理解され则认为られる、ということであろう。前者が原始神話を因果律的な推論の挫折であるとするのに対し、後者は、原始神話は矛盾や曖昧さのない因果関係や論理性を追求することにはそもそも関心が向けられていないとするものである。

そのような前論理的無関心は、幼稚さや能力の低さを意味するものではない。すでに神話を絶えず身近に感じている人々にとっては、それ以上の説明を必要としないということなのであ

る。原始神話を持つ人々にとっては、神話的世界は、いつでも現世界に影響しているものである。Lévy-Bruhl は、「神話上の祖先や英雄、半人半動物は、精神を楽しませ、恐れさせ、あるいは悦ばせるための作り物ではない。それは、過去に存在し、現在もなお存在している存在であり、現世界にあってわれわれを取巻く實在の何にもまして、さらに深くさらに本質的な實在である」(p74) と述べ、原始神話は空想的な説話ではないとする。原始神話を信じる人々は、神話の世界と自分たちの現世界が異なっているという認識を持っているが、現世界にあるものは神話の世界の持つ力を分け与えられており、それが彼らの現世界に影響を与える、と Lévy-Bruhl は論じている。神話は、土地・動植物・人々の生活とつながりを持ったもう一つの世界であり、それを信じている人々にとっては疑いなくリアリティを持つものであるといえる。

③ 神秘的な力の分有

これまで述べてきたように、原始神話では、神話の中の神秘的祖先や超自然的存在が、人間や動植物、土地、その他人間が存在することに関わる様々な事物・現象が、時空間を超え、因果関係や論理のカテゴリを無視して前論理的に結びつく。その結びつけられた複合の中で、意味や神秘的な力が分け持たれる、つまり分有（融即）されることになる。

人間もまた、神話を語り、演じることで、神話的な存在と和合し、その存在と同じ力が分有され、現世界のできごとに影響を与えられるようになる。神話を語ることや祭儀で神話を演じることは、模倣することによって神秘的な力を分有することである。このことを、神秘的な存在に祈ってその力を借りるという程度に理解するのは、単純に過ぎるようである。分有することの中に含まれている、意識されないほど

その社会を支配している存在の分かち合い、無意識的同一化の側面がここで重要となってくる。神話の英雄の名前を所有することや、行為を完全に模倣することで、呪術をおこなう者は、神秘的な存在に祈るのではなく、その存在と同一化し、みずからがその存在となって神秘的な力を得る。

このように、現在生きている人間が神話的祖先である英雄を先例として模倣し、そのことが現実に影響を与えると信じられている。神話的祖先が神話期におこなった様々な行為とその結果は、利害に関係なく現実の人間に分有され、模倣されざるを得ない。不死の老婆の神話では、彼女の子どもがいついかに従わなかったために彼女は不死を失い、そのことが死の起源であるとされている。これを、人間が死ななければいけないことの原因が子どもの不服従に帰されている物語であるとするのは、原始神話の分有の力を無視した解釈であろう。あらゆる人間が死ななければならない真の原因は、神話で語られた子どもの行為ではなく、神話的世界で起こったできごとの分有であって、そのために老婆よりのちに生きる人間は彼女を模倣して死ななければならない。「神話はこの分有によってしか、その意味をなさない」(p174) のである。事物や現象への共感による呪術にも、神話的祖先の行為と同じように、模倣することによる分有の要素が含まれる。雨乞いの儀式においては、雨はすでにほとんど降っているという状況を実演することで雨に暗示のようにはたらきかけると信じられる。モデルが事象を導くのである。

『原始神話学』に挙げられている様々な例を読むと、分有の力を得るために模倣するのか、分有があるために模倣させられているのかわからなくなってくるが、これも因果論的な考え方が持つ疑問であろう。人間が神話的祖先の先例や神秘的な存在を模倣によって分有することが所

与であるとするれば、模倣する / させられるは明確にならず、人間は神話期からそうするものと決まっているとしかいいようがなくなる。「われわれの経験科学がなすように、現象の連鎖に執着すると、原因と結果のつながりは高いところから低いところまで無限に続く。人はいつでもある二次的原因から二次的原因へ遡ろうと試みることができる。しかし、ある神話が、今日存在するものはどうして前時間の時期に存在したものの＜再生された＞ものであるかを教え、その存在理由をこの＜模倣＝分有＞にあるとすれば、それ以上何を求めることができよう。…(中略)…神話はわれわれが超絶対あるいは形而上学的と呼ぶであろうような理由を与える。しかし、当然、神話は決してこの理由を特殊でまたは具体的な用語でしか現わさないし、また物語の形態でしか現わさない」(p183)。

④ 原始神話の消滅と痕跡

そうして現わされた原始神話という物語によって、病気の治療もおこなわれる。病気を克服するにあたって、神話が語られ、神秘的な動物の力や最初に病気を持った神話的祖先など、超自然的な世界の力が分有される。原始神話が、想像の産物ではなく、人間の幸福、時には生存そのものに重大な影響を持つものであると考えられていたことがわかる。それだけに、集団は外部に対して神話の秘密を守っただけではなく、集団内でも選ばれた者のみが知る神話もあった。神話にふさわしい継承者がいないと、その神話の秘密は、それを知る最後の者とともに葬られ、原始神話は消滅してしまう。

また、宗教的な信念が徐々に形づくられ、固有の礼拝が組織立てられると、曖昧さや矛盾は整理され、“原始”神話ではなく、体系化された宗教や古代神話となっていく。矛盾に満ちた荒唐無稽な物語は、神聖さを失って秘される必

要がなくなり、一般の人々にも語られる伝説・俗話・説話となる。神聖な原始神話から通俗な物語へのこのような移行は、人々が気づかないうちに起こる。伝説・俗話は、原始神話の物語の内容とそれほど相違がない場合でも、生き生きとした真実性や、現実にも影響するほどの分有の力を持っているかどうかという点で、原始神話とは異なっている。そのために、ある部族にとっては神話である物語が、近隣の部族にとっては通俗の説話となっているということが生じ得る。

このようにして消滅していった原始的な神話の痕跡が、根強く残りながらも、その意味がわからなくなっていることもある。その例として、Lévy-Bruhl は、世界中のすでに構成された宗教の中に半人・半動物の神々がいることを挙げる。「伝統は執拗にこれらの混合像を幾世紀にもわたって維持しようとした。神話とともに、半人・半動物の祖先の信念を維持した時代には、これらの像の意味は明瞭であった。前・宗教が固有の宗教や礼拝に位置を譲るにつれて、それは徐々に曖昧になる。ついに、これらの像は、もはや常識の眼からすると奇怪または滑稽な謎でしかなくなってしまう」(pp216-217)。

俗話や、構造化された神々の伝説になっても、神話期の分有の名残である、事物が様々な形態に変わり得る流動性は失われていない。説話や伝説には、動物であり人間である存在の物語や、皮を取りかえて変形する人間の物語がある。Lévy-Bruhl はこのような類の説話が民俗学的に数多く採取されていることを示したのち、説話ではなく、実際に起こった、目撃された事実として荒唐無稽なできごとが語られる例をいくつか挙げている。説話の内容をまだ信じている人々にとっては、人間がハイエナに変わる事件を目撃することも日常的にありえないことではない。このことは、説話が徐々に真実性を失っ

てきている、「比較的に進んだ社会」でも、驚くべき信念は完全に失われているわけではないことを示しているといえるだろう。

⑤ 荒唐無稽な物語の魅力

童話のような物語に出てくる、動物や事象の荒唐無稽な流動性、つまり原始神話の名残は、地域・時代を問わず、至るところに見られる。赤ずきんの狼も、長靴をはいたネコも、動物であり人間である。シンデレラの物語では、カボチャが馬車に、ネズミが馬や御者に変わり、真夜中にもとに戻る。「これらの俗話は、知られている通り古い時代に始まるものであるが、今に至っても亡びようとしていない。他の点では、きわめて相違する時代や文化を持ちながら、こうした共通の要素を持つことの深い意味を閑却するのは誤りであろう。宗教的信念、社会構造、人口の密度、経済生活、対外関係、芸術と科学との進歩、これらのあらゆる面、なおまたその他の面で、われわれの社会と原始的と呼ばれる社会との隔りは絶えず増大している。ところが、民俗学は、その本質的特徴は、至るところ相似のままである」(p293)。西ヨーロッパ諸社会の民俗学的な説話の中にも荒唐無稽で不条理でさえあるものがあるが、そうした物語の中に、神秘的な傾向や、分有がはたらく時の矛盾に対する無関心を読むことができるのである。このような説話の中の、概念が曖昧で人間と動物が容易に入れ替わる流動的な世界は、もはや経験の中に含まれた真実ではなく、今では「空想の王国」であって経験された現実の一部ではなくなった。論理的に方向づけられた精神は、流動的な世界の矛盾と相容れないのである。

今ではこうした「作り話」は信じられないが、その一方で、「われわれのうちで、これらの話の魅力に無感覚なものはほとんどいない。…(中略) …それらのもたらすものは、他の何物から

も求められないであろうことを、皆は本能的に感じる」(p294)。この魅力はどこからくるのであろうか。Lévy-Bruhl は、かつて世界中で原始神話が真実の物語として信じられていたならば、説話が根強く人々に好まれることもさして不思議ではないと述べる。ここで注目されるのは、彼が“なぜ原始的な人々は空想的な物語を信じるのか”ではなくて“なぜわれわれはすでに長いあいだそれを信じなくなっているのか”を説明すべき問題と考えていることである。早くも古代から始まっていた合理的であろうとする文化は、原始的な心性と精神を「絶縁」させていったが、それは数世紀に渡る努力を必要とした。そこまで努力して論理的であろうとすることを、世界中が一様に目指しているわけではないと彼は述べる。明言されていないが、ここに、論理的であるか否かを基準に社会の発展を考える Tylor らへの批判が示されているように思われる。論理性への志向は、一部の社会の価値観に過ぎず、普遍的なものではないのである。

『原始神話学』の最後の数ページを読むと、人間にとって、論理的、合理的であろうとすることのほうが不自然なのではないかと思われてくる。論理を追求しようとすれば、絶えず人間の心に、拘束や抑制といった「一種の暴力を加えなくてはならない」(p297)。現実が合理的であらねばならないのと同様に、小説や劇などの虚構の世界の多くも、現実の物理的な可能性や論理的に真実らしく考えられることに矛盾することができない。

しかし、民俗学的な説話は、そうした矛盾を意に介さない。説話の持つ魅力の深い理由はここにあると Lévy-Bruhl は考えている。物語に耳を傾けるあいだは、抑制が外れ、合理的な態度を取らなくてもよくなり、そのことが弛緩をもたらす。それは、祖先の見た流動的な世界を垣間見ることである。「それらをつくった心性

から、どのようにわれわれが遠ざかっていると信じようとも、その光景はわれわれを捉え、われわれを離さない」(p297)。近現代においても、人間は、荒唐無稽な物語に魅力を感じ、時にはそれを必要とする。そうした物語がもたらす弛緩と「心の底からの快さ」に Lévy-Bruhl が言及していることは、物語の持つ癒しということを考えるうえで示唆に富んでいるのではないかと思われる。

Ⅲ. 考察 一矛盾、曖昧さ、荒唐無稽さを含んだ物語をどのように捉えるか—

① Lévy-Bruhl の姿勢

『原始神話学』の全体を通して印象深いのは、Lévy-Bruhl 自身のものごとの捉え方、姿勢である。神話を持つ人々の心性を扱った研究であるが、神話の内容の象徴的な理解よりも、内容に含まれる矛盾、言葉の曖昧さや筋の荒唐無稽さなど、神話の語られ方に重点が置かれている。

論理的であるか否かという価値観で社会や人間を判断することには限界がある。むしろ、その価値観を持つ社会のほうが例外的であるのかもしれないとして、自らの属する文化の基準を相対化して眺める視点が、彼の研究を特徴づけている。概念にならない曖昧で複合的な観念、矛盾に満ちた荒唐無稽な原始神話を、「われわれの慣れた方法」で論理の枠に押し込めたり寸断したりして理解することに、彼は繰り返し反対を表明する。『未開社会の思惟』が著された段階では、中国などの東洋の「恐るべき出鱈目」さの意味を把握できず否定的な見解を示すなど、論理的ではないことに彼のまなざしが沿いきれない趣があったが、『原始神話学』では荒唐無稽な物語を信じる人々とできるだけ同じ視点から現象を見ようとする、共感的な記述が多くなっている。

鷺がカンガルーを槍で突く原始神話を、多くの動物説話のように、鷺が変身して人間となったという筋を当てはめる、あるいは鷺が擬人化されていると理解することは可能であり、多くの人が知らず知らずのうちにそのように物語を理解するかもしれない。しかし、それは「われわれの慣れた方法」に従って、物語の本質を曲げてしまうことである。物語をそのままに受けとれば、この槍を持った神秘的な存在は鷺でもあり人間でもある。鷺と人間という2つの矛盾したあり方のあいだをつなぐ変身のストーリーも、擬人化という理解も必要ない。もし人間・動植物・事物・現象が力や意味を分有しあっている世界が信じられていたとすれば、一見荒唐無稽にみえる神秘的な存在は、説話的にはもっともらしい“鷺が変身した人間”や“擬人化された鷺”よりも、荒唐無稽だからこそ世界との分有が感じられ、どこかその辺りを歩いていそうな生きた人間と同様の、真実らしい生々しさを持つものかもしれない。そして“神話を信じる人々にとって真実らしく思われるであろうこと”を、Lévy-Bruhl 自身が“感じて”いるようである。曖昧さや荒唐無稽さを了解するためには「超自然的で神話的な実在を前にして、原始人の恒常的態度を知ること」に努め、複合があるがままに捉えて、強いて分析しようとしなくて、どのようにして彼らが超自然的なものの情的範疇に関係しているのかを「感じる」という「欠きえない努力」が必要である（pp27-28）という言葉に、彼が人間や社会の本質に迫ろうとする時の態度が示されているように思われる。

そのように、感じよう、了解しようとする姿勢を持ちながら、またその一方で彼は、了解できると考えてしまうことにも慎重である。このことは、「インディアンがある種の動物との間にあると想像している、というよりは「感じる」分有を了解させるのに一われわれは決して

完全に了解しうるなどと誇張するものではないが」（p252）などの記述の端々に窺われる。『未開社会の思惟』に記されている言葉を借りれば、対象を安易に理解しようとする研究者の企てについて、「うまく行ったと思ったとき、矢は的を外れているものだ」と彼は警告する。

『原始神話学』は心理学者に向けて書かれた著作ではないが、そこに示された Lévy-Bruhl の姿勢は、人間の心という目に見えないものを対象とする心理学の研究者や、クライアントの話に耳を傾ける心理臨床家の姿勢と通底するように思われる。あるがままに捉えること、無理に分析しようとしなくて、感じることに努力、容易に了解できると考えないこと、これらはどれをとっても、人間と人間が向き合う際になおざりにすることのできない重要な要素であろう。

② 神話を信じることから生じる力

感じるように原始神話を（不十分であっても）了解することは、可能な限り、語り手と同じ水平にまで視点を揃えて見ようとするのである。それは、神話を語った人々がその物語を信じていることを信じることにつながる。『原始神話学』では、神話が信じられている社会では、それは人々を楽しませる物語ではなく、現実に関わったこと、それも現世界の人間も含めた事物のありかたに関わる問題を含んだできごととして語られると繰り返し主張する。古来、人々が祭祀・儀礼に莫大な労力・財、時には人命をかけていたことを思えば、呪術や神を信じていた時代に生きた人々にとって超自然的な力が関与する物語は世界観そのものであり、自分たちの生死にすらつながるように体験されていたであろう。

神話を研究する人々は、人々が神話という現実を“生きていた”ことをしばしば強調する。

Nietzsche, F.W. は「ギリシア人は、神話的な眼を、明るい歴史時代に入ったのちも長く持ち続け、それによって彼らは神の顕現を、そして神話が依然として生き続けていることを信じていた」(Nietzsche, 1875-1876)と、Kerényi, K. は「神話が生きていた時代には、神話を身近に感じた人々のあいだでは、神話は一種の音楽のように歌われるだけではなかった。つまり神話は生きられていたのである」(Jung ほか, 1951)と述べている。また、Eliade, M. は、神話が「実にかかわるがゆえに」絶対的に真実であり、「人は想起もしくは再演されるできごとの神聖な、高揚させる力によって捉えられるという意味において、なんらかの方法で神話を「生きる」のである」(Eliade, 1963)と主張している。

これは、原始神話がただ信じられていた、ということと同じではない。神話への信任を、Lévy-Bruhl はニューヨークの火事のニュースに例えて説明している。災害のニュースを耳にした時、その場を見ていない人々でも、それがどんな重大な結果をもたらしたのか現実のできごととしてある程度は経験的に推測でき、また、ニュースが伝えている災害が本当に起こったかどうか通常は疑ったりしない。現代社会で、ニュースをそのように受け取ることを盲信であると非難されることはほとんどないだろう。もし神話が語り手にとって直接的な現実であるという Lévy-Bruhl の主張を前提とするなら、神話の語り手・聞き手たちは“現実にもしなない神話を盲目的に信じている”のではなく、“神話から現実には何が起こったか経験的に推測でき、内容を疑ってみようとしなない”のである。Lévy-Bruhl は「その世界は所与である」と表現する。神秘的なもの、現実の人間・動植物・事物・現象などが複雑に影響を及ぼしあう流動的な世界は、最初からある疑いえないものなのである。

『原始神話学』の中で挙げられている神秘的な方法を用いての治療の例は、Ellenberger, H.F. が力動精神医学の遠祖として位置づけた、呪医などによる原始治療や宗教的な儀式 (Ellenberger, 1970) を思い起こさせる。Ellenberger は、シャーマンが治療や、怪物や神を演じる儀式による治療について、世界各地で報告された多くの例を挙げている。それらの例は、心身が抱える病いとその治療・治癒について、近代科学的な見解からすると荒唐無稽といえる、Lévy-Bruhl のいう前論理的な物語を、世界中で様々な地域の人々が、長く持ち続けてきたことを示している。Ellenberger が記しているように、原始療法から近現代の力動論に至るまで、治療される側とする側の双方がある治療の物語を信じるのが、その物語の内容云々以前に、治癒へと向かうために不可欠な要素である。呪術や祓魔術、メスメリズム、催眠術によって実際に治癒した事例が報告されてきたのは、その中に意識的/無意識的欺瞞が含まれるにしても、おもに治療者と被治療者とが、その物語の中に自分たちがいることに気づかないほどに、同じ物語を信じ没頭していたことが治癒につながったためであると考えられる。そうであるならば、神話の力は、人々がその物語を真に信じることから生じたと考えられる。それは、『原始神話学』で強調されている、様々なものが分有されあった流動的な世界の中で発揮される力であるといえる。

③ 見失われた現代のミュトス

このように、神話は、かつては現実として信じられ、力を持っていた。しかし、論理的であることに価値観を置き始めた一部の文化によって、長い時間をかけて神話は真実らしさを失っていった、と Lévy-Bruhl は述べる。

近現代を生きる人々が知ることのできる神話

は、その多くが、Homērosなどの詩人が芸術にまで高めた神話的題材や、古事記や日本書紀などのように体系化された古典の中にある。多くの現代人にとって、呪術や神などの超自然的な力によって与えられる病苦や癒しの物語は、書物の中に印刷され、読まれる神話や伝承にすぎない。大山(2004)は、「無文字の口承の時代、人々は自分たちや世界の始源の物語を語り継いでいった。自分たちの根拠や祖霊とのつながりを断ち切らぬよう、注意深く反復され伝えられてきた。こうした神話は太古からの物語として語り継がれる一方で、口承の必然として、あるいは語られる時の必然的な布置や部族の集団的な無意識を引き受けながら、そのときどきの新たな要素や変容を加え生まれ変わってきた。…(中略)…しかし、そうしたミュトスが文字によって書き留められテキストとなると、それは途端に硬化し、その生成の力を失ってしまう」と述べている。ミュトスとはロゴスと対になって相対的に考えられる広い概念であり、神話・伝承・伝説という意味で用いられることもあるが、ここでいわれているミュトスとは、「それぞれの民族が、自分たちの生命や世界の起源を物語で表現しようとする事」(大山, 2004)である。神話は人の心を惹きつける魅力があり、創造の源泉となることが多いが、大山のいうように、テキストの創造は神話を硬化させることになる。「原始人にとって恵まれた経験であるものは、われわれにとっては死文のままでいるものである」(p187)という Lévy-Bruhl の嘆きのとおり、『原始神話学』の中で描き出されているような流動的な世界を体験的に感じることは、近現代の論理に慣れた人間の多くにはできなくなっている。大山はこれを「ミュトスの喪失」とであると述べる。

しかし、「人間が完全に神話から解放されたことなどこれまでにあっただろうか?」と

Jung が述べているとおり、ミュトスはいくら否定してもロゴスの中に紛れ込んでくる。Jung によれば、「神話なしにあるいは神話の外に生きているつもりの人間は例外なのである。そればかりか根なし草であって、過去や先祖の命(つねにわれわれのうちに生きている)とも現在の人間社会とも、真の結びつきをもっていない」、「世界中の全ての伝統を一度に斬って捨ててしまうことができるとしても、次の世代には神話と宗教史のすべてがあらたにふたたびはじまるだろうといえる。一種の知的傲慢の時代でも神話を捨て去ることのできるひとはごくまれである。民衆は決して神話から離れない」のである(Jung, 1952)。

現代でも、オカルト現象や都市伝説が好まれ、新興宗教が生まれ、“～神話”といわれる必ずしも合理的ではない信念が社会に広がることもある。科学や論理を信じることでさえ、1つの神話として捉えられる。荒唐無稽な「驢馬の皮」や固定したストーリーと化した神々や英雄の伝説の話を誰もが喜んで聴けなかったとしても、それ以上に、何かを信奉し無意識的にその世界観に染まっていることの中に現代のミュトスがあるといえることができる。例えば、人間は論理(ロゴス)を志向するはずだという無意識的な信念を現代社会全体が持っているとするれば、その信念そのものが、前論理的なミュトスを逆説的に示しているのかもしれない。ミュトスは喪失されたのではなく、ロゴスの中に見失われたのではないだろうか。なぜ心理臨床において物語が重要であるのかを論じる際に、世界に包まれること、力を分有すること、信じることが、議論の手掛かりになるのではないかと筆者は考えている。現代の見えにくくなったミュトスでは、今を生きる人々が、神話の世界に包まれることも、力を分有することも、信じることも難しくなってしまった。1つの大きな神話の世界

に包まれていることが困難になったために、個人は、多様な物語を心の中に持たざるを得なくなったといえるだろう。

④ 矛盾、曖昧さ、荒唐無稽さがもたらす癒し

人間と動植物が分有によって結ばれている神話を、比較的受け入れやすい筋に則って変身や擬人化の物語として聴くことは、その物語の理解を助ける一方で、そのような筋では理解されない、動物でもあり人間でもある生々しい神秘的存在のイメージを損なってしまう。神話にとってまず大切なのは、世界に強い影響を与えると信じられている存在とその力をイメージとして捉えることであり、筋立てて説明することではない。

筋立てて説明することは、心理学において、物語ることの持つ大きな意味であるとされてきた。ものごとを意味づけ 1 つの筋に結びつける物語を重視する心理学の流れは、近現代の「方向づけられた思考」(Jung, 1952) によって徐々に削ぎ落とされつつあった、個人の心の多様さ、豊かさに再び焦点を当てる動きであった。しかし、鷲が槍を持つ神話のような、筋立てることが重視されないものから、物語が持つ別の側面も見えてくる。Lévy-Bruhl は、「説明すべきものの中に、超自然界の力の働きの存在を<感じ>、<認め>ているのであるから、はたして物語すなわち神話以外の形式をとることができたであろうか」(p181) と述べている。このことは、語り手にとって物語が感じられ認められている現実であると同時に、聴き手にとってもそのようであるように期待されることを暗に示している。つまり前論理的な物語の中の事象と事象、語り手と聴き手をつなぐものは、必ずしも筋ではなくて、分有の力がはたらく世界に包まれていることなのである。

この“形式”で充分満足できず、さらに探索

を進めようとする、「その執拗さは不穏当で無作法」(p60) であり、一種の不敬虔、冒瀆とさえ語り手には感じられることもある。また、荒唐無稽な物語の真実性を疑うことは、「われわれの態度、習慣、心的志向を、彼らに当てはめようとする」ことに由来すると Lévy-Bruhl は述べる。「まさにわれわれは、彼らの心性の意味に入り込もうとの努力をしないで、長い世紀を費やして発展した批評精神や論理的要求を持つ現在のわれわれなみに、よく考えもしないでそれらを推測するがままにしているのである…(中略)…物語の真実について言っているものを、われわれは、おそらく彼らはわれわれの質問を了解しないのではあるまいとか、彼らの答えは真面目でないとか信じるよりほか知らないほどに歪曲する。しかし、つとめて忍耐強く努力して、真に彼らの考え方に入ることが必要である。彼らの心的態度をわれわれの心的態度のモデルで想像する代わりに、彼らの言語や行動の中に現れているがままに、それを解放することである」(pp279-280)。これを心理臨床に置き換えれば、クライアントがみずからの物語を表現する時、たとえ矛盾や曖昧さを孕んでいても強いて論理的なストーリーとして了解しようとしないうこと、クライアントの常日頃の体験と物語がどのように結びついているのかを感じ取る努力をすることが、心理臨床には欠かせない態度であり、そうでなければ心理臨床家は不穏当で無作法な聴き手になりかねない、といえるだろう。

論理を志向する現代社会の中に生きる人間である以上、クライアントが自分の体験を 1 つのストーリーにしていくことは、その人自身を人生の納得いかなさから守るためには必要なことであろう。しかし、本当に信じられる物語は、ミユトスの領域のものである。人生についてのストーリーを更新し続けていくだけで、人間は

本当に納得できる物語を得られるのだろうか。分有の力を持っていた原始神話は、矛盾や曖昧さを含んだものであった。そうした物語の中に互いに相反するものが含まれていたとしても、それらはそのまま“含まれている”ことを許される。神話はまず、整合性のある体系であることよりも、外界のあらゆる現象や人間の心の複雑さから生じる無数の無意識的なイメージを引き受けるために、いくつもの筋に分かれる可能性を含み込むことが必要だったのであろう。現代人が前論理的な心性をまだ持っているとするれば、表面的には納得できるストーリーを持ったとしても、そのストーリーで引き受けられなかったイメージが矛盾や曖昧さとなって語りの中に混入され、時にはその語りを荒唐無稽にするかもしれない。実際、心理臨床の場面では、プレイセラピーで子どもたちが演じる物語だけではなく、十分に論理的であるはずの成人の語りにも、矛盾、曖昧さ、荒唐無稽さは至るところにあると、筆者は感じる。

河合隼雄は、「たましい」や「いのち」は「分割というはたらきを拒否する」と述べ、矛盾の許容されたイメージのもつ力を指摘し矛盾することによってこそ「癒しの泉」になったのではないかと述べている（河合、1995）。河合は、「筋を思わず知らずこちらが見つけようとしている時もあるし、クライアントはクライアントのほうで何か筋をつけようとしていることもある」（河合、1995）と述べているように、人間の心には筋をつけて語ろうとする、また、筋があるように聴こうとする働きがある。クライアントの中には、日常での、筋をつけて語らなければいけない対人関係に適応できなくなった人、あるいは、論理的であらねばならないという考えに身動きがとれず曖昧で整理のつかない気持ちを抱えたままになっている人もいる。あるいは、ある1つの筋のある語りに固執し、イメージや

気持ちが自由に動かないクライアントもいる。曖昧で荒唐無稽なイメージや矛盾を含んだ語り全体を1つの物語として受け止め、整理のできない語りができる時空間というものが、場合によっては必要である。論理的であらねばならないということが「一種の暴力」であるのなら、それから解放されて一息つくことにも意味があり、この弛緩が心の底から快さを感じさせるという『原始神話学』の最後の主張に同意することができるだろう。

⑤ 心理臨床における分有の意味

Lévy-Bruhl が提唱した「神秘的融即（分有）」という概念は、Jung, C.G. によって、心理学的には主体が客体とア・プリオリな一体性で直接的に結びつくことであり（Jung, 1921）、集団との無意識的の同一化にはほかならない（Jung, 1950）と説明されている。Jung も指摘していることであるが、ある社会で分有が強くはたれば、大衆の中にいる安心感のために個人は無責任で危険な状態を引き起こしかねず、また、集団との無意識的の同一化から安易に得られた力は持続的ではなく、それに頼ってはい個人は成長は深みに達しない。Neumann, E. も、融即（分有）を原初の混沌や無意識的な一体感と結びついた未発達な心性として論じている（Neumann, 1971）。

しかし、分有は、「集団との無意識的の同一化」という側面のみではなく、あらゆる事象どうしが関係を持ち得るという側面をも持つ。分有によって人間が森羅万象と結びついており、力を分け与えられているという信念は、人間が世界に生きるための力強い基盤になり得るのではないだろうか。日本の臨床心理学においては、矛盾の持つ癒し（河合、1995）や曖昧さの肯定的側面（河合ほか、2003）にも目を向ける傾向があるが、同様に、荒唐無稽であることそのものの

が力を持つ分有の状態を、意識や自我の“未発達”としてだけではなく、これまで述べたような積極的な意味を持つものとして捉え直してもよいのではないかと筆者は考えている。

クライアントと、セラピストとのつながり、様々な内的イメージとのつながり、環境や現象とのつながりが、時には治療の意味を（時には危険を）もたらすことも、分有という側面から考えることができると思われる。前節で述べた、矛盾や曖昧さを論理的なストーリーとして了解しようとししない態度の重要性は、この問題にも関連する。語りが、矛盾や曖昧さ、荒唐無稽さをありのままに含むことが許されなければ、分有が持つミユトスの力は、表面的にはもっともらしく整ったストーリーのロゴスの中に見失われてしまう。場合によっては、セラピストに受け入れられなかったクライアントの前論理性は、セラピストの気づかないところで無意識的なイメージや集団との同一化に向かい、分有の危険な側面を志向し始める可能性もあるだろう。クライアントが本当に信じるものをセラピストが共有しミユトスの領域でつながるためには、矛盾、曖昧さ、荒唐無稽さを含んでいる物語が持つ生々しさに、セラピストが目を向ける必要があるのではないだろうか。

IV. おわりに

以前、子どもたちの描画について、成長に従って発達する表現の巧みさと、本当に表現したいことが表現できているかどうかとは別であると感じたことがあった。本当らしくうまく伝えることよりも、“そのように表現したかった”ことが優先される場合、おとなのようであることを基準とした発達の観点で捉えたのでは見誤ることがあるように思われる。

文化も、個々の人間も、ある成熟のかたち

を念頭に置いた発達の軸で捉えるには限界がある。自らが慣れ親しんだ理解を他者に押しつけたのでは誤った結論に導かれることになる。『原始神話学』の議論の底流に常にある Lévy-Bruhl のこの信念は、クライアントの語りを聴く、あるいは作品を眺める筆者自身の姿勢を省みた時に、決して軽んじることのできない戒めを含んだものとして思い起こされる。

現代でも、動物や現象の力を分有する人間が活躍する荒唐無稽なファンタジーを、小説や漫画、映画を通して「ひじょうに喜」んで見聞きする人々、あるいはもっと無意識的に前論理的信念の中に入り込んでいる人々がいる。そのことは、分有が人々に対して持つ魅力と癒しの力、それと同時にある危うさを感じさせるが、本稿ではその問題についての多面的な議論が充分にできなかった。この点については今後の課題として考えていきたい。

参考・引用文献

- Eliade, M. (1957) *Myth, Rêves et Mystères*. Gallimard, Paris. (岡三郎訳 1972 神話と夢想と秘儀. 国文社)
- Eliade, M. (1963) *Myth and reality*. Harper & Row, New York. (中村恭子訳 1973 神話と現実 エリアード著作集第 7 巻. せりか書房)
- Ellenberger, H.F. (1970) *The Discovery of the Unconscious*. Basic Books Inc., New York. (木村敏・中井久夫監訳 1980 無意識の発見—力動精神医学発達史 上・下. 弘文堂)
- Jung, C.G. (1921) *Psychologische Typen*, Rascher Verlag, Zürich. (林道義訳 1987 タイプ論. みすず書房)
- Jung, C.G. (1950) *Gestaltungen des Unbewußten*, Rascher, Zürich. (林道義訳 1991 生まれ変わりについて 個性化とマンダラ. みすず書房)
- Jung, C. G. (1952) *Symbole der Wndlung. Analyse des Vorspiels zu einer Schizophrenie. Vierteumgearbeitete Auflage von "Wndlungen und Symbole der Libido"*. Rascher Verlag, Zürich. (野村美紀子訳 1985 変容の象徴 精

精神分裂病の前駆症状. 筑摩書房)

Jung, C. G. & Kerényi, K. (1951) *Einführung in das Wesen der Mythologie —Das Göttliche Kind/Das Göttliche Mädechen*. Rhein-Verlag AG, Zürich. (杉浦忠夫訳 1975 晶文全書 神話学入門. 晶文社)

河合隼雄 (1995) 物語と人間の科学、物語と科学
河合隼雄著作集 12. 岩波書店.

河合隼雄 (2005) 物語の知・臨床の知—夢の物語、
臨床心理学、5-4, pp547-552.

河合隼雄・中沢新一 (2003) あいまいの知. 岩波書店.

Lévy-Bruhl, L. (1910) *Les Fonctions mentales dans les Société Inférieures*. Les Presses universitaires de France, Paris. (山田吉彦訳 1953 未開社会の思惟 上・下. 岩波書店)

Lévy-Bruhl, L. (1935) *La Mytologie Primitive*. Librairie Fêlix Alcan, Paris. (古野清人訳 1970 原始神話学. 弘文堂)

Neumann, E. (1971) *Ursprungsgeschichte des Bewusstseins*. Walter-Verlag AG Olten, Zürich und Düsseldorf. (林道義訳 2006 意識の起源史. 紀伊国屋書店)

Nietzsche, F. W. (1875-1876) *Der Gottesdienst der Griechen*, *Nietzsches works*, Bd.XIX; Dritte Abteilung Bd.III, A. Kröner Verlag, Leipzig. (戸塚七郎・泉治典・上妻精訳 1994 古典ギリシアの精神 ニーチェ全集 1. 筑摩書房)

大山泰宏 (2004) 物語を生きる、こころの科学、
118, pp116-122.

Tylor, E.B. (1891) *Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art and Custom*. Murray, London. (比屋根安定訳 1962 原始文化 神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究. 誠信書房)

＜付記＞本稿は京都大学大学院教育学研究科に提出した博士論文の一部に加筆修正したものである。

Abstract

A Study of Tales containing Contradiction, Ambiguity, and Absurdness: Lévy-Bruhl, L. “La Mytologie Primitive” and Clinical Psychological Views.

Fumiko TANAKA

Lévy-Bruhl, Lucien (1857-1939) is known for word ‘participation mystique’ which has affected Jungian analytical psychology. By advocating the concept of ‘prelogical’ participation, he claimed that researchers could not understand any phenomena with one scale which can be regarded as plausible for the culture to which the researchers belong. His posture expressed above is well shown by his work “La Mytologie Primitive”, over his comprehensions about many tales containing contradiction, ambiguity, and absurdness, different from myth prepared systematically. In this study, the author would like to argue whether the important things suggestive for psychotherapy is contained in his view which admonishes against interpreting the primitive myth as which mystical existences are felt freshly in a modern style.

In some anthropological works, the researchers stated their opinions that, when some amazing phenomena suddenly appeared, although primitive people considered carefully and needed myths as explanations of those phenomena, they got confused for the weakness of logical capability, and invented absurd myths. Lévy-Bruhl’s works throw questions at such views. In his opinion, those are only self-righteous understandings for which thoughts and feelings of the European who aims at logic applied to primitive mentality. He asserted that, for the primitive people, the mythological world consisted of the direct actual things revealed in their dreams or amazing phenomena, and they believed in the reality of mythological world just because it was absurd. People who believed prelogical tales were performing and telling such myths and had participation in mystical world to own the power of animals, plants, objects, and phenomena.

We who live in the present age have also prelogical vestiges, and need some tales with contradiction, ambiguity, and absurdness. As Lévy-Bruhl did about primitive myth, we psychotherapists sometimes need to take in the absurdity of our clients as it is without logic. It would be necessary for us to prepare the clinical psychological sessions as times and places released from the need to be logical.

Key words : Lévy-Bruhl, “La Mytologie Primitive”, participation